睡蓮

SUIREN

愛知大学
教育研究支援財団
広報誌

12
2025 / 4

巻頭特集［知の対話］

私たちはどう長く生きるか。

国立長寿医療研究センター
理事長
荒井 秀典

×

株式会社ハンナプロジェクト
代表取締役
伊藤 華づ枝

Professional Eye

弓道が与えてくれた豊かな人生

弓道日本代表選手
久野研太・弥花

日本画家
平松 礼二

2025年就航予定のクルーズ船「飛鳥Ⅲ」の
船内展示のために制作した作品を、
展覧会「旅する日本画－洋上の美術館・飛鳥Ⅲから－」
で先行公開。

AERS

知で活きる人へ。
公益財団法人 愛知大学
教育研究支援財団
AICHI UNIVERSITY EDUCATION RESEARCH SUPPORT FOUNDATION

Contents

［知の対話］

私たちはどう長く生きるか。

P.03

［Professional Eye］

弓道が与えてくれた
豊かな人生

弓道日本代表選手
久野研太・弥花

P.10

［AERSの一年］

【教育活動の支援】

短期大学部ハワイ研修
―コロナ禍の経験を糧にして―等

P.12

「奨学金・奨励賞授与式」等

P.15

【寄附者名簿】

P.19

「睡蓮」について（題字「睡蓮」平松 礼二氏 筆）

愛知大学の教育思想は、国際社会や地域社会のリーダーとなり、世界をダイナミックに動かす人材を育てること。睡蓮の花言葉には、そのような人材に必要な「清純な心」「純粋」「優しさ」「信頼」の意味が含まれており、彼らの未来を支える愛知大学教育研究支援財団の情報発信誌を「睡蓮」と名付けました。

表紙のご紹介

平松 礼二氏 作「モネの池に夏雲走る2」
（1998年、所蔵先:フランス 公立ジヴェルニー印象派美術館）

モネの池に映る夏雲はモコモコと盛り上がる綿雲なのだろうか。ピンク色に染まる雲は、夏の太陽に照らされた光色なのか、それとも夏の長い日暮れの夕焼け色なのだろうか。雲が流れる中、静かに羽を休めるトンボが瞑想の世界に誘ってくれる。

ごあいさつ

日頃は、「公益財団法人 愛知大学教育研究支援財団」の活動に格別のご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

当財団は、1965年に同窓会が設立した「財団法人 愛知大学同友会（母校「愛知大学」への恒久的支援を目的）」を前身とし、2012年11月、後援会の参画も得て公益財団法人として再出発をいたしました。

以来、愛知大学における学術研究及び教育活動を支援し、もって広く学術の発展と教育の充実並びに不特定多数の者の利益の増進に寄与することを目的として、公益財団法人としての使命を果たすべく公益目的事業の安定的な実施に努めているところでございます。

当財団が、学術研究助成、課外活動支援、奨学金制度を始めとする諸事業を積極的に推進することができておりますのも、この趣旨にご理解とご賛同をいただいております同窓会、後援会をはじめ、広く一般の企業や個人の方々のご厚情の賜物でございます。

ここに、皆様方に、2024年度の事業実施概況等のご報告を兼ねまして、機関誌「睡蓮 第12号」を送付させていただきます。是非ともご高覧いただき、今後とも変わらぬご支援を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

公益財団法人
愛知大学教育研究支援財団
理事長
加藤 満憲

評議員・理事名簿（2025年4月現在）

評議員	地主 道夫	理事	加藤 満憲（理事長）
	佐藤 祈美栄		林 昇平（常務理事）
	熊谷 豊和		長谷川 信義
	西原 健二		古川 為之
	土井 義昭		那須 真理子
	岸田 充広		柘植 繁久
	杉本 みさ紀		八木 好郎
	金田 学		武山 卓史
	河合 泰		平井 治彦
	坂野 嘉昭		唐 啓山
	砂山 幸雄		加納 寛
	吉垣 実		鈴木 正也
	古川 千歳		功刀 由紀子
		監事	小出 恭己
			南 成

巻頭特集

知の対話

国立長寿医療研究センター
理事長
荒井 秀典
ARAI Hidenori

×

株式会社ハンナプロジェクト
代表取締役
伊藤 華づ枝
ITO Kazue

私たちはどう長く生きるか。

日本は世界的に見て平均寿命が長く「長寿大国」と呼ばれています。私たちはその長寿大国の現在と未来にどのように向き合えば、より長くより幸せに生きていけるのでしょうか?今回は、国立長寿医療研究センター理事長で医学博士の荒井秀典氏と、ハンナプロジェクト代表取締役で料理研究家の伊藤華づ枝氏に、長寿と食から見えてくる私たちの未来について語っていただきました。

自分の食べたいものを自分で作る人が増えればこの国は変わる

ー 今回のテーマは「長生きすることの幸せ」です。最初に、長生きすることをどのように捉えているか教えてもらえますか?

荒井／現在の日本人の平均寿命が84歳で、男性が81.05歳、女性が87.09歳です。また健康上の問題で日常生活に制限されることなく過ごせる期間である「健康寿命」については男性72.57歳、女性75.45歳です。やっぱり健康に長生きすることが重要で、体だけの健康だけではなく、社会的にも精神的にもいろんな意味で健康でなければ本当の意味での長生き、もっと言えば幸福な長生きとは言えないのではないかと私は思います。
そのためには趣味や仕事、家族との交わりなど、人生を楽しむということが鍵になります。そして、「食事と運動」がとても大事で、食事が占める位置は非常に大きいと思います。朝昼晩の食事を楽しみながら、いかに健康を維持するかということですね。食事を楽しむという意味で、仲間とお酒を飲みながら、ということも大事だと思います。お酒単独だとどうしても健康に悪いというイメージがつきやすいですが、お酒を飲みながらみんなと楽しく食事の時間を過ごすことで健康につながるのではと個人的には思っています。食事の細かい内容も大切ですが、あまり深く考えずにある程度のおいしい食事を楽しむことも大事だと思いますね。病院で栄養指導するときも、あれもダメこれもダメではなくて、限られた中で食べましょうと。食べる方がいかにおいしく、その生きがいを感じられるように食べるか、ということは大事だと思っています。

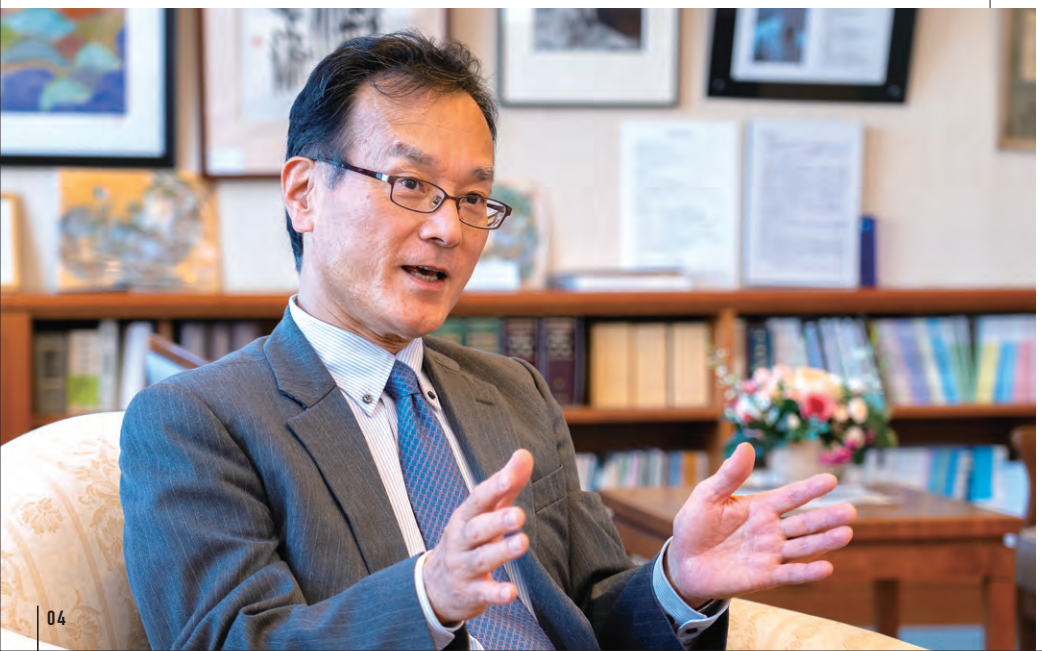
国立長寿医療研究センター

伊藤／私は料理研究家、管理栄養士の立場からさまざまな方に指導させていただいていて、「生きることは食べること」だと教えています。私が経営しているお料理教室と食のプロダクションは、“料理と健康と栄養と予防医学”をテーマにしています。おいしいお料理を食べるだけではなく、特に高齢者には自分で料理を作ることも大事だと話しています。“男のエプロン一年生”という料理教室では、まずとにかく自分の食べるものを自分で作れるように、買い物にも行って、そしてある程度栄養バランスを考えて自分で作って食べられるように指導します。お料理を作るということは、まず献立を考えないといけないですね。買い物に行けば、これとこれを買い足そうとか、冷蔵庫の食材を見て古くなってきたからひとまず火を通しておこうかとか考えるようになり、頭も結構使います。それから自分で料理をすると、自分だけではなくその料理をふるまう周りの方も健康に過ごせます。みんなが幸せになるということです。周りに喜ばれれば、ご自身も幸せになりますから、相乗効果が生まれ、そういう過程の中で生きる力を得ていくんじゃないかということをみなさまにお伝えしております。

荒井／料理をするというのはとてもいいことだと思います。だんだん高齢になってくると、いろいろな機能が落ちてきます。味覚、嗅覚、手の動作などです。具体的に言うと、匂いを感じにくくなったり、 舌が味覚を感じにくくなって、どうしても塩分が強くなったりします。そうすると、血圧が上がりやすくなり、薬をたくさん飲まなければいけないような状態になってしまうんですね。そういう現実がありながら料理をいつまでも作り続けるというのは、献立を考えたり、買い物に行くと作るものに合わせてどういう食材が必要かということも考えなければいけないので、頭の刺激になります。料理を毎日することは、認知症の予防の訓練にもなると思いますね。自分で作ることで塩分を適切に取ることができますし、血圧を上げずに健康な暮らしを続けるということにもつながっていきますね。最終的に自分の口に入って食べるものなので、その過程を十分にエンジョイできると、人生そのものも楽しめると思います。
自分の好きなものを自分で作るという日本人の男性が増えてくると、社会もだいぶ変わってくると思います。お父さんも、お母さんも、台所で食事を作っているというようなことが一般的になれば、今の親世代の子供たちが大人になった時、いつでもどこでもちゃんと自分で作るということがきっと当たり前になる。今とはまた違う社会になるのかなと思っています。そう考えると「食育」は小さい時からおこなうべきとても大事なことだと思います。

国立長寿医療研究センター理事長 荒井 秀典氏

京都大学医学部卒業後、同大学院医学研究科博士課程(内科系専攻)修了。医学博士。
京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻教授を経て、国立研究開発法人国立長寿医療研究センター副院長、同病院長に就任し、2019年から現職。「高齢者の心と体の自立を促進し、健康長寿社会の構築に貢献する」理念の実現を目指す。また、日本老年学会理事長として、老年学の普及・啓発や高齢者の諸問題に対する提言など、高齢化最先進国の役割を高める活動の強化にも努めている。



生きる意欲のために食べる
自分の未来のために食べる

ー 長生きを楽しむコツを教えてください

荒井／「食べる・寝る・出す」は、人間にとって絶対に必要な動作です。年を重ねていくとこれらはどんどん低下し、私たちは悲観してしまいます。大体の人は、落ちてしまってから考えるんですね。ということは、落ちないように若い時から準備をしていくということは大事だと思います。例えば耳の機能は、生活習慣に関係していて、特に男性が加齢とともに落ちやすくなります。運動不足や生活の乱れが、耳の機能に影響するんですね。味覚は栄養素のバランスに左右されます。例えば亜鉛が少ないと味覚が落ちやすいため、その点を意識すればある程度予防できます。予防できることは意識してできるだけ予防していくことが大切です。

伊藤／私は学び続けることが一番重要だと思いますね。生徒さんには、情報量が多い新聞を読んで体を動かして、そして考えて行動するように伝えています。そしてもうひとつ、パートナーに対しては精いっぱい愛情を示しなさいと言っています。ただその前提として気をつけないといけないのは、食べることをおろそかにすると生きる意欲がなくなります。だから「生きることは食べること」なんですね。

経済格差が健康格差に
つながっている

荒井／先生の料理教室のみなさんは、老いへの意識が高く向上心もあり、長生きに対して理想的な人たちだと思います。我々が今大きな課題として捉えているのは、そういう人たちではない人たちをどうするかということですね。どうやってサポートして健康を維持し、社会的弱者にならないようにしていくか。例えば一人暮らしの方だと、いろんな食材をひとりで消費しきれないために、経済的に考えてコンビニ弁当を買って安く上げてしまうことがよく見受けられます。そうすると塩分がどうしても多いとか、味が濃いものが入っていたりとか、健康の面からすると悪循環になっていきます。経済格差が健康格差につながっているんですね。

株式会社ハンナプロジェクト代表取締役 **伊藤 華づ枝**氏

「食・栄養・健康・予防医学」を総合的に研究する全国で活躍中のマルチ料理研究家。
テレビ・ラジオ等のマスコミ出演、企業・行政・団体等への講演、執筆、講座の開設など活動内容は多彩で、常に「心と体の豊かさ」を提案し続けている。特に、自らの経験を生かした「食育」に関する講演・執筆活動には定評があり、2005年「愛・地球博」では、楽しみながら食の大切さを学ぶ「子ども参加型パビリオン」にてアドバイザーを務めた。

伊藤／そのためにはやっぱり学校教育がとても大事なことだと改めて強く思います。家庭科はとても軽く扱われているんですね。私が食のプロダクションをやっている理由は、食をおろそかにしたら日本は滅びる、もっと言えば世界は滅びるというぐらいに思ってるんです。　生きるために一番重要なのは食べることだと考えた時に、家庭科を軽く扱う日本の教育は間違っているんじゃないでしょうか。なぜ食についてもっと教育しないのでしょうか。また、治療のための医学ではなく、予防のための医学、さらに言えば健康増進のための医学のためにも、食の教育は必要なんじゃないでしょうか。これが、料理の世界に50年携わってきて私がずっと感じてきている思いです。
常日頃から伝えているのは、できたものを買ってきて食べるということをやめて、なるべく自分で作るようにと言っています。自分がおいしいと感じるものを作って、その中でバランスを考えていけば自然と何を作って食べたらいいかという知識を得ていくわけです。これが大事なことなんですね。
幼稚園で講演をすると、お母様方に大豆は茹でただけでおいしいということを知ってもらうために、その場で実践するんですね。一晩水につけていただけの大豆を圧力鍋で1分煮るんです。　それを小さいお子さんたちが食べると、何回でも食べに来るんです。その光景にお母様方も驚いて、先生、大豆はスープ入れましたか?とか、塩を入れましたか?と質問してこられると、私が答えるんです。今見てたでしょって。沸騰して圧力鍋1分で茹でる。塩もスープを入れてませんよ、でも食べておいしいって思いますよねって。お子さんというのは本当に正直でして、おいしくないものは絶対食べないんです。こういう体験をしていくことが食の教育だと思うんですね。

便利とおいしさの問題
健康とおいしさの課題

荒井／現代はファストフードをはじめ、気軽にいろんな食べ物がもうどこでも手に入りますから、手軽に買って食べてしまうとか、家でも市販のものを混ぜるだけで、ある程度おいしく味わえるものができるという便利さを選択してしまいがちです。ただおいしさと便利さを選択した結果、健康リスクを積み上げているという事実につながっていることも意識する必要があります。
これからさらに高齢化になっていく時、小さい頃からいろいろと便利なものを食べてしまっている子供たちがそのまま大人になっていく。実はそれが一番大きな問題だと思っています。今の高齢者は比較的貧しい時代に育ったので、当時の粗食をひとつの要因として寿命が伸びているとも考えられますが、今の若い人は、味の濃いもの、甘いもの、脂っこいものなどいろんなものが手に入る社会に暮ら

しているので、この先50〜60年後にどういう影響が出てくるのか、非常に心配ですね。平均寿命が短くなる可能性もあるかなとも感じています。
「沖縄ショック」という有名な話があります。もともと沖縄県は長寿の県で、男女ともに平均寿命1位という年もありましたが、戦後のアメリカによる占領期間中に、ハンバーガーなどの欧米食文化が本土よりもかなり早く入ったことで、食生活がアメリカ化するという流れがありました。その結果、肥満や糖尿病が増えて、男性の平均寿命がかつては1位だったのが、2020年の調査では、他の要因ももちろんありますが43位にまで下がってしまったんですね。このような現象が日本全体として起こる可能性は十分に考えられるので、やっぱり食育にちゃんと力を入れないと大変なことになるんじゃないかと思います。

伊藤／先生の「便利とおいしさ」とは対照的な話になりますが、「健康とおいしさ」について私が感じますのは、管理栄養士による一般的な栄養指導方法についてです。例えば塩分が多いとかプリン体が多いとか、糖質が多いからこれは避けてこちらにしましょうなど、　栄養素とカロリー計算をメインとする通常の栄養指導では味についてあまり追求されません。ただそうすると患者さんもなかなか身につかないと思うんですね。
私がおこなっている食育のオンラインセミナーで、糖尿病ご専門の医師や内科医師の方々が熱心に受けてくださっています。そのセミナーの中で、自分たちが作った食事をどうしても食べない患者さんがいて、いかに食べさせて生かすかを考え、でもどうしたらいいかわからないという質問をいただくことがありました。その悩みに対して私は、多分おいしくないんじゃないですかと答えました。 おいしければ食べるし、いい香りがすれば食べるんです。まずは、おいしいものを作って食べさせることに焦点を絞るべきだと伝えました。健康的で完璧な料理であったとしても、おいしくなければ続きません。管理栄養士さんのお料理っておいしくないんじゃない?ってよく言われるんです。たしかに数値合わせて健康的な食事を作ると、やっぱりおいしく食べられないんですよね。でもそこであきらめるのではなく、いかにおいしい料理を作るかいうことに焦点を置かないといけません。私は管理栄養士でもありますが、数値を合わせる前に、いかにおいしく食べられるかっていうことを基本に考えて食事を作っています。健康とおいしさの両方を満たすということは極めて重要なことなんです。

荒井／糖尿病などの成人病になってから始まる食事は本当に大変です。ただ今のままいくと成人病が増えていくことは間違いありません。寿命が短くなる可能性も大いにあると思います。ではこの状況をどうやって変えていくか。私は、国としてアクションを起こす時期に来ているのではないかと思っています。昔はみんなある程度均一に大きくなりましたが、今は生まれた時から格差があります。この点は大きいですね。共働きが増えて食事の仕方もさまざまになり、自宅で一家だんらんの食事を楽しむことが以前に比べて減っていることも想像できます。対照的に、便利でおいしいものを一人で食べる環境がどんどん身近になっている。これはもう悪循環になってしまっているので、根本的に変えていく必要がありますが、変える手段がないとも感じています。本当に難しい問題ですね。

京都の出汁（だし）文化が食育問題解決の鍵を握っている

伊藤／私が料理教室でおいしさのポイントとして伝えているのが、出汁なんです。出汁を取りましょうと。出汁を取るということは別に全然難しくありません。かつお節を入れて2分煮るだけなんですね。先生は京都出身でいらっしゃるからご存知かと思いますが、料理人さんたちは大量のかつお節を入れて、その香りのいいものを使いますが、家庭で毎日そこまではやってられません。私は1週間分の出汁をとって、冷蔵庫にストックしそれを使って料理をするように指導をしています。こういうことはまず料理人さんは絶対しないですし、こういう指導をされる方があまりいないのか、その簡単さとおいしさに、みなさん感動されますし、びっくりされます。お出汁さえあれば何でもおいしく料理ができるんです。それからもうひとつ、この頃の家庭ではだしパックを使うんですけれども、私どもは本枯と言って発酵したかつお節を使っています。それで出汁を取ったら、その出し殻全部でふりかけを作って食べるんです。そうするとまったく捨てないで済みます。 おいしくいただきながら、ゴミも出さないということにつなげているわけです。

荒井／たしかにそうですね。京都の出汁文化が全国的に広まり、食育でしっかりと教育していくことによって、みんながその出汁を使って料理を楽しむことができれば、自然と血圧も下がってきますし、成人病の増加を抑えることにもつながると思います。すばらしい考えですね。今、長寿の方たちは昔そのお出汁でご飯を食べてきているので、体の根っこが元気なんですね。小さい時の食事は非常に大きな影響を持っていますので、少しでも早く取り掛かるべきだと思いますね。

体を動かすために心を動かす

–将来の高齢者たちが、健康に年を重ねるために、何に気をつけていくべきですか?

荒井／元気な高齢者というと粗食のイメージを持つ人がいるかもしれませんが、もちろん粗食でいい人もいれば、ある程度食べた方がいい人もいるんですね。そこは体質が大きいと思います。粗食で105歳まで生きられた先輩医師は、100歳まで全国を講演して回っていました。一方で、90歳を過ぎてもお肉を食べてエネルギーをしっかり取って長生きするという方もいらっしゃいます。これはどっちが正解かは、ちょっとわからないと僕は思っています。ただいずれにしても食事を楽しむということが大事ですね。いやいや食べるということではなかなか元気でいられないんじゃないかと思っていて、楽しく食べる、仲間と食べることが大事なんじゃないでしょうか。基本はやっぱりおいしい食事だと思いますね。

伊藤／最近は、いかに食べるかの時代から、いかに食べないでおくかっていう時代に入っています。ファスティングという、お腹の中を渋滞させない時間を作るための短時間断食が流行しているのもそういう時代の流れからだと思います。

荒井／食生活を変えたり、食育が気になるということでしたら、そう思った時からスタートするに越したことはないと思います。体力面について申し上げると、年齢とともにどうしても機能筋肉が弱ってきます。高齢になってから、機能が落ちた後でも努力すれば一応戻りますが、若い時から落ちないようにしておけば楽ですよと説明しています。中年の時から食生活の工夫や運動を続けていかないと、70代 80代になって機能が落ちた時に始めても、それはやっぱりしんどいですね。でもほとんどの人は 日々の生活で大変な思いを実感していないので、早めに始められる人は残念ですけれども多くはありません。
それからもうひとつ、体の問題だけではなくて、環境の問題も大事だと思います。身体と環境が揃ってこその健康寿命だと思うので、単に体の健康だけにこだわって、例えば誰ともしゃべらないとか、誰とも交流しないというのは、やっぱり一般的にはですけれども、人間の幸せは得られにくいと思いますので、家族や友人や趣味などの心を満たす環境も大事だと思います。

伊藤／私は、人間ってやっぱり目標がないと生きる意欲が出ないのかなって思うんですね。何年後に何をどうしていたいという目標を定めて、初めて到達しようという意欲が生まれる。回り道をしても全然いいんです。ただ目標を立てないと動けないということです。例えば、一日に3000歩とか、あるいは5000歩とか、高齢者でも何かその目標を定めることは重要かなと思います。私は朝、ストレッチをするんですけれども、今日は8分やったけど、明日は9分やろうとか10分やろうとか、そういう目標を立てるわけです。ただこういうふうに目標を定めると言っている時点で、日本人は豊かすぎて目標がないというところもあるかもしれないですね。

ー お二人それぞれの、健康のためには気をつけていることは?

荒井／デスクワークが非常に多く、夜遅くまで仕事をしているということで、運動の必要性はいつも実感しています。今は、エアロバイクを家に帰って30分か40分運動をするようにしています。あとジムに行って、指導していただきながら筋トレもしています。今日もこのあと行きます。運動については気をつけていますが、食事はなかなか難しくて、週末は自宅に帰るので、家内が作ってくれますが、平日は自分で作らなければいけないので、一応でき上がっているものは買わないようにしていて、自分でなんとか料理しています。冬場はお鍋が多くなりますね。できるだけ栄養バランスを考えながら、塩分も多くならないように気をつけています。昔は食べなかった納豆も食べるようになりましたし、大豆製品を意識してお豆腐もたくさん食べますし、野菜もできるだけ意識して食べるようにしています。一応栄養は考えながら、下手な包丁も使って努力はしています。実はファスティングにも興味があり、いずれトライしたいですね。

伊藤／私は毎朝のストレッチと、プールに行くことですね。お料理レッスンでいつも立って動いてますので、これは健康にいいことかなと思っています。私には目標がありまして、懐石料理を習った先生が92歳まで現役でお仕事をなさっていたんですね。ですので、恩師を超えられるのは年齢しかないと思っていまして93歳まで頑張る気持ちでいます。自分の活動を通じて社会に貢献するという意欲があれば、人間は何歳までででも、バタッと倒れるまで生きられるんじゃないかと。そういう意味では、精神力は結構大事かなと思っています。精神力も食べ物が影響すると思いますし、年齢とともにいろいろなものが低下していくことをカバーできるのもやっぱり食だという信念を強く持っています。
今日は貴重なお話を聞かせていただきましてありがとうございました。ご指導をまたよろしくお願いします。

荒井／こちらこそ勉強になりました。ありがとうございました。

伊藤／実は今日お弁当をお持ちしました。先生、お忙しいと思いまして。お夕飯にでも召し上がってください。

荒井／助かります。ではお言葉に甘えていただきます。

30種類の食材を使用した特製弁当

平松礼二画伯が、2025年就航予定のクルーズ船「飛鳥Ⅲ」の船内展示のために制作した作品を、展覧会「旅する日本画－洋上の美術館・飛鳥Ⅲから－」で先行公開。

クルーズ船「飛鳥Ⅲ」では、「動く洋上の美術館」をコンセプトの一つとして、船内に日本の芸術文化を支える作家の美術作品、工芸作品が数多く飾られることとなっております。この展覧会では、その展示作家の一人である平松礼二画伯が「世界を旅する日本画」を制作テーマとして作成された36点の中から、「モネの睡蓮」を主題とした作品や、日本の四季を色彩豊かに描いた作品などの30点が、船内展示となる就航前の先行公開として展示されました。（就航後の鑑賞は乗船時のみ）
この展覧会（2024年6月28日～9月23日）の初日に、平松礼二画伯のトークイベントが開催されましたので、その概要をここに紹介します。

私とクルーズ船「飛鳥」との出会いは、「まさか」という偶然にありまして、この度の関わりは望外の喜びであります。
「飛鳥Ⅲ」は、総トン数が5万2千トンを超える巨大なクルーズ船で、絵画を前面に打ち出した「洋上の美術館」と言わしめる船です。「飛鳥」ⅠやⅡとの日本の伝統文化芸術の付き合いは、空いたスペースに絵や漆などを飾る程度のほのかなものでしたが、「飛鳥Ⅲ」では、社会が変わってきたのでしょう。日本伝統文化芸術を船全体に位置付け、世界に日本の文化芸術を広める旅、日本文化の宣伝役を担わせることが大筋と聞いております。

ジャポニズム睡蓮

さくらの季

依頼を受けたのは、絵画では、仲間うちの千住博さんや土屋礼一さんなど大体同世代の画家達や、高校の1年後輩で壁画を中心に描いている田村能里子さんで、茶器や花器、漆などの日本伝統工芸品については公益社団法人日本工芸会が全面的にご協力しておられます。
郵船クルーズ（株）さんに招かれた私達は、少々の参加ではつまらなくなるような、あるいは何か切迫感をもって気合を入れられたような不思議な環境に呑まれる中、「兎に角、平松さん協力してくれ」と頼まれまして、既に受けていた仕事を延ばしてでも「飛鳥Ⅲ」のため1年間空けましょうと承諾したのが、今から2年前のことです。

そして、1年間没頭しまして描き上げたのが36点の作品です。後程ご覧いただきますが、結構大きな作品ばかりです。
それにプラス、船内に高さ22メートルの大きな階段がありますが、ここに展示しきれない横幅1.8メートル高さ20メートルの階段アート作品の作成依頼がありました。これは流石に体力的にも時間的にも不可能でしたので、フランスの公立美術館の援助を受けまして、収蔵されている私の作品をコンピューター処理した版画を飾るということになりました。「飛鳥Ⅲ」は現在ドイツで建造中ですので、本展覧会では写真展示となりましたが、船本体とともにコンピューターでグラフィック処理されたそのイメージ図を紹介しております。
「飛鳥Ⅲ」は、現在、日本の文化芸術を思いっきり沢山詰め込んで、世界の国々へ交流の旅に航海する準備段階にありますが、船内に展示される工芸品や絵画は、一旦船に乗ってしまいますとご覧いただけなくなる方が多くなってしまいます。そこで、取り敢えず、私が一番早く完成できましたので、ご縁のある町立湯河原美術館で皆様にご覧いただけたらという思いから、この展覧会の開催に至りました。
よく、平松さんと「飛鳥」との結びつきは不思議だね、と聞かれます。
実は、私と家内が銀婚式を迎え、その祝いをどうしようかと相談しまして、消えてなくなる思い出ではなく記念になるような行事がいいなあということとなりました。ある日、新聞で「飛鳥」の船旅の広告を見つけ、当時は仕事が忙しくて飛行機による移動が多くゆっくり旅をしたことがなかったので、これはいいということで「飛鳥」の船旅が決まりました。
そこで、これならゆっくりできるということで本を沢山買い込んで船に乗り込んだのですが、余りの快適さから本は1冊も読めず、楽しくて夢のような2週間でした。
勿論、スケッチブックは携行していますので各港の風景などを描きましたが、孤独が楽しめるという予想に反し、下船するまで興奮冷めやらずというか、兎に角、世の中にこんな楽しいことがあるのかという特別な思い出となりました。
それから数十年経って、運命かどうか分かりませんが、推薦者の「平松の作品なら世界の人に観てもらえるのではないか」という声掛けで今に至り、郵船クルーズ（株）さんと不思議な縁を語り合ったところです。
私も、この「まさか」の偶然の再会に大喜びで、15～16点の依頼だったのですが、描いているうちに作品が36点になってしまいました。郵船クルーズ（株）さんも流石で、全て引き取り、船が帰ってくるたびに乗せ換えて展示しましょうということになりました。

大洋と花不二

モネの池・蝶々

母港は横浜で、世界の港を回ってくるわけですが、その間、日本の文化芸術を堪能できるように、海外の方々に現地で乗り込んでいただき船内を美術館のように巡っていただくこととなっております。これは、船舶史の中でも類のない文化交流で、私達作家にとりましてもこれ以上に嬉しいことはありません。
作家にとって一番励みになるのは、過去から今、今から未来へどうやって申し送りをしていくか継承していくか、という大きな課題がある中、それができる機会を与えて頂けたことです。お陰様で、足腰が痛いのも忘れて描き上げることができました。
作品のコンセプトは、「世界の文化交流」ですので、日本人の持つ特性や装飾的遊び心、様式性という三つの要素を組み込んでいます。
船は、現在ドイツの造船所で建造中ですが、2025年の春には、作品の展示を含めた就航のための内装を施すため日本に帰ってきます。今回の展覧会は、船に乗られる方も乗られない方もお見えになることを思い、美術館のご協力もあって開催することが出来ました。
皆様には、日本の文化芸術が世界の港を巡り人と交流する「洋上の美術館」をイメージしていただき、夢を膨らませてご覧いただけたら幸いです。

彩彩の池

Professional Eye

弓道が与えてくれた豊かな人生

featuring

弓道日本代表選手
久野研太・弥花

くのけんた 愛知県生まれ
〈弓歴〉
平成12年 4月 豊田市立末野原中学校 弓道部
平成15年 4月 愛知県立豊田西高等学校 弓道部
平成18年 4月 東北大学 弓道部
平成22年 4月 卒業
〈入賞歴〉
平成20年 8月 全日本学生選手権大会 団体２位
平成21年11月 全日本学生弓道王座決定戦 団体２位
令和６年 2月 第４回世界弓道大会 ２位

くのみか 愛知県生まれ
〈弓歴〉
平成22年 4月 豊川市立音羽中学校 弓道部
平成25年 4月 愛知県立豊橋商業高等学校 弓道部
平成28年 4月 愛知大学 弓道部
令和２年 3月 卒業
〈入賞歴（全国優勝以上）〉
平成25年 8月 全国高等学校総合体育大会 団体優勝
平成30年10月 国民体育大会 近的優勝
令和元年11月 全日本学生弓道王座決定戦 団体優勝
令和６年 2月 第４回世界弓道大会 優勝

勝ち負けだけではない難しさと面白さがある

2024年2月29日、名古屋市の日本ガイシホールで「第4回世界弓道大会」が開催された。「弓道世界一」を目指して世界25の国と地域から参加。日本は見事4連覇を果たした。この大会に夫婦で日本代表として出場したのが、久野研太・弥花夫妻である。世界大会で採用された「近的競技」は、28メートル先にある直径36センチの的を狙って、チーム3人で1人4本ずつ合計12本の矢を放ち、その当たった本数を競った。「弓道はただ勝ち負けだけではなくて、礼儀や正しい所作が重んじられます。そこが難しさでもあり、面白さでもあるのかなと思います」と研太さんは語ってくれた。

弓道に導かれて今がある

弥花さんが初めて弓道と出会ったのは、中学校で部活を決める時。元々球技系は苦手な中で弓道部を目にし、そこで知り合いの先輩が袴姿で弓を引いている姿に憧れたことが入部のきっかけになった。高校は、弓道部が毎年全国大会へ行くレベルの、豊橋商業高校に進学を決めたが、初めて見た時入部をやめようかと思うほどに圧倒された。ところが1年生のインターハイで弥花さんの運命が変わっていく。「たまたま補欠に入ったんですけど先輩たちが優勝し、私も優勝メンバーになりました。中学では大会で勝ったことがあまりなく、高校で急に成長した

感じです」。外部講師の先生からの勧めがきっかけとなり、弥花さんは愛知大学へ進学。4年生に先輩がいたこと、愛知大学が東海地区では強豪なことが進学の決め手となった。

研太さんが弓道を始めたのも中学の時。弓道は中学より前からやっている人はあまりいないので、活躍できる可能性が高いと考えた。豊田西高校へ進み、自分なりに一所懸命に弓道と向き合ったが、十分な結果は残せなかった。ただ、弓道への思いは強く、国公立大学の中でも弓道の強い東北大学へ進学した。

現在の二人の活躍には、大学四年間の経験が大きく影響している。弥花さんは、高校までは先生の指導のもとに練習を積み重ねていたが、大学では先生ではなく先輩の指導と、何より自分で考えることが求められるようなり、「自分で考えて自分で引いて自分を成長させることをひたすら繰り返した」と話す。

研太さんにとっての大学生活は、「弓道に懸け、全国大会で入賞することもできました。目標に向けて取り組む姿勢とその結果を得る過程を経験できたことは大きかったです。弓の上達だけではなく、人格もそこで形成されたかなと思います」。

弥花さんは大学を卒業すると、母校の豊橋商業高校で、生徒に指導をしながら自分も稽古に取り組んでいた。生徒に教えることで、自分が学ぶことも多かった。

研太さんは、大学卒業後地元に戻り社会人となった。そして弓道も続けていた。以前から弓道の試合や国民スポーツ大会の練習会で顔を合わせる機会もあり、お互いのことを知りながら、コロナの時期に交際がスタート。そして結婚へと導かれた。

弓道と家族との密接な日常

現在は三人家族となり、弓道との向き合い方も変化してきている。それを紐解く上で鍵を握るのが、自宅にあるプライベート弓道場「尽心館」である。弥花さんは、夜に子供を寝かしつけてから研太さんとここで練習をしている。そして研太さんは、夜だけではなく朝、仕事へ行く前にも練習をする。二人は弓道選手としての相手を、どのように見ているのだろうか。

研太さんは弥花さんについて「弓道は精神面がとても大事で、練習でできていても大きな試合でできなくなることが多いんです。ほとんどの人は、少しは不安を感じたりすると思いますが、弥花さんはそういった後ろ向きな気持ちになることなく、本当に前向きで平常心を保っている。いい選手だなと思います」と語った。

一方弥花さんは研太さんについて「弓道への向き合い方がとてもコツコツと真面目で、ここを変えようと言ったら、練習してその通りに変え、結果的に向上していてすごいなって思います」と語った。

ちなみに二人で練習をしながら、お互いにアドバイスをすることはあまりないという。相手にアドバイスをしないのは、自分で考える、自分が弓道と向き合うという癖なのかもと話す。たしかに「尽心館」には、お互いが気を遣いすぎない、心地のいい距離感で弓道と向き合うことができる穏やかな空気に包まれていた。

弓道と築いてきた過去 弓道と築いていく未来

愛大生へのメッセージを聞いたところ、大学四年間の弓道に対する二人の熱量が垣間見えた。

研太さんは「自分で打ち込めることがあれば一所懸命やるといいと思います。取り組んだ先に、成果が出ることもあれば出ないこともあります。がんばれるという実感を持てることで、プレッシャーに潰されたり、仕事の出来不出来で気持ちが揺れ動くことがなくなり、それが社会に出てきっと活きてくると思います」と、自分が経験してきたからこその思いを言葉にしてくれた。

弥花さんは「少しでもやってみたいと思ったら、やってみてほしいと思います。私は本当に弓道しかしてませんでしたが、何かひとつでも夢中になれるものを見つけてください」と話してくれた。弓道と深く関わり、弓道とともに築いてきた現在に裏付けられた、強いメッセージである。

最後に弓道で叶えたい夢を聞いた。すると二人はともに「日本一になることが夢」と答えた。研太さんは「奥さんは日本一になってるんですけど、私はまだなったことがないので、今はそれを目指して弓を引いています」とのこと。弥花さんは「個人戦で日本一を取ったことがありません。いつか取れればいいなと思ってがんばっています」ということだった。二人の弓道への真摯な姿を見ると、夫婦でいつか日本一に輝く日が来ることを期待せずにはいられない。これからの活躍がますます楽しみな二人である。

AERSの一年
（アース）

明日の地域社会に貢献する人材を育成する
愛知大学教育研究支援財団（愛称AERS（アース））の一年を振り返りました。

［AERS（アース）とは：AICHIUNIVERSITY EDUCATION RESEARCH SUPPORT FOUNDATION（愛知大学教育研究支援財団）の頭文字を合わせた愛称です。AERS（アース）は、より良い明日（アース）に向かおうと言う思いも込められています。］

教育活動の支援

短期大学部ハワイ研修 －コロナ禍の経験を糧にして―

愛知大学短期大学部
杉本貴代 教授

今年2月2日、5年ぶりに短期大学部のハワイ研修（Aloha Study Program)がオアフ島で実施されました。6泊8日の短期日程には、1年生6名が参加しました。入学直後からLeeward Community College(以下、リーワード)の学生とのオンライン交流を通して意欲的に学んできました。現地では多くの皆さんのご協力とご指導いただき、オアフ島を横断して学びの大冒険をしてきました。その一端をご紹介します。

研修の目的は、ハワイの伝統文化と自然環境保護活動の実際について学ぶことでした。ハワイの伝統的資源利用のしくみに則り、ハワイの主食とされるタロイモ栽培を体験しました（図1･2）。オアフ島のマウナルア湾の生態系を守るNPOのMālama Maunaluaと一緒に海に入って活動しました（図3）。一見異なって見えるタロイモ畑やサンゴ礁の保護の取り組みがハワイの伝統的規範に則っていて、頑健なコミュニティーを形成するしくみも学びました。また日本ではあまり知られていない日系移民のハワイへの貢献を詳細に知ることができました。

タロイモ畑の栽培体験（ハワイ大学協力）

タロイモ畑の栽培体験（ハワイ大学協力）

マウナルア湾での自然環境保護活動
（Mālama Maunalua協力）

さて、今年のハワイ研修は、従来の英語レッスン中心の研修から、より体験重視のプログラムでした。この転換はコロナ禍で現地研修が困難となった時期に、愛短とLeewardとの学び合いの中から生まれたものです。2023年2月のオンラインでのハワイ研修では、ハワイの自然環境活動や住民の考え方などを学びました。2024年6月には愛短の学生が「日本の食、日系移民、SDGs」をテーマにオンラインで意見交換しました。2月の現地プログラムは、参加学生の関心に合わせて緻密に計画されたものでした。

これまで短大ハワイ研修は貴財団の各種助成金に支えられてきました。2019年度の現地研修に加えて、2022年度はオンラインによるハワイ研修にも助成金をいただきました。オンラインで交流する中で明らかになったことは、日米両国には「費用面で留学は難しいけれど、学びたい!」という潜在的な留学希望者が多いことです。オンライン交流は、そうしたすべての学生にとって福音となることが期待されます。

国際交流には困難はつきものです。しかし短大ハワイ研修は学生主体の新たな国際理解教育を目指します。改めて貴財団の短大ハワイ研修へのご支援に感謝申し上げますとともに、今後とも温かいご支援をよろしくお願いいたします。

日本語クラスの皆さんとの再会とタンデム学習
（リーワード･コミュニティーカレッジ協力）

教育活動の支援

知のミーティング「まちづくりの想いを語る」

愛知大学同窓会 岐阜東濃支部
支部長 猿爪雅治

同窓会支部活動の一環として2024年7月21日、岐阜県多治見市の中之郷テラスにおいて前高山市長・國島芳明氏（1973年法経学部卒業）に「高山の想いを育み、そして実現へ」というテーマで、飛騨高山のまちづくりについて講演をしていただきました。岐阜東濃支部には行政に携わっている卒業生が多く、また、そうした方々へのアドバイスになるのではと考えました。当日は、広瀬裕樹愛知大学理事長兼学長や八木好郎同窓会長、また、渡辺幸伸御嵩町長（1991年法経学部卒業）はじめ同窓会役員や地域の方々約60名に参加していただきました。講演では、高山市役所入庁から市長退任までの49年間の中で力を入れられた「観光政策」について語っていただきました。

『市長就任当初、市民が他力（行政）依存型になることなく生活ができるために、これからの主要産業として観光に注目した。一つの施策として「高山市観光株式会社の概念で市政を運営する」を掲げた。市民は観光に関する事業者、かつ株主であるとの考え、利益を直接（事業収入）または配当（市民サービス）で収受する。行政は「企画、財務、総務部門」を、「民間は宿泊、宣伝販促、料飲接待、輸送通信」などを担当し、役割・責任分担を明確にした。この施策を成功に結び付けるために、「観光資源はそこに生きる住民の生き様と自然環境の中にあるという認識」、「本物を提供するという考え方」、など13のキーワードを掲げた。地域総点検の実施による課題抽出と、その地域に合ったインナーとアウターブランディングの同時、相互実施によってこそ相乗効果を生み出せるということである。』

最後に、市長退任後の心境を『行動の制約、他人の目に晒される生活から逃れた解放感を得て、長年の念願であった四国八十八ケ所の一人歩きお遍路を実現した。改めて人として生きていくには一人では生きていけないことを思い知らされた。これからの人生は、これまで自分を導き生かしてくれた人々や社会に対して御礼の奉仕に充てるべきと改めて自覚した。』と述べられました。

当日、講演会に出席された方々から國島氏の市政運営の力強い想いや観光都市を築き上げるための施策に感動、これからの人生の過ごし方にパワーをもらったなどの声が多く、同窓会の支部活動としてとても有意義でした。

ゾウのふんを使った商品開発でタイの子供たちを支援する

法学部4年（2024年度時）
豊嶋 智南

私たちはタイのチェンマイにある学生寮「カサロンの家」に住む子供たちを支援するため、ゾウのフンから作る紙「プープーペーパー」を使ったアップサイクル商品の企画・製作・販売を行いました。カサロンの家ではタイの山岳少数民族の子供たち約50名が十分な教育を受けるため、親元を離れて自立した生活をしています。私たちはこのカサロンの家で日本の遊びやおにぎり作りを通して交流する中で、子供たちが夢を持ちながら勉学に励んでいることや学びたくても学べない環境がある現状を知り、「子供たちの力になりたい」「支援を継続的なものにしたい」という思いが強まりました。本企画で制作した商品はタイを象徴するゾウのフンから作る紙からできています。実際に私たちは、ゾウの餌やりやフンの回収から、天日干し・洗浄・煮立てる・形成・乾燥など一通りの工程を体験しました。ゾウのフンと聞き、衛生面やにおいが不安でしたが、草食動物であるため、においは全く気にならず、また多くの工程を経るため衛生面の問題もないと分かりました。

商品には、ピアスやブレスレット、タイピンなどのアクセサリー商品や、子供たちの絵を使った商品があり、どれも色鮮やかで繊維が感じられる他にないものとなっています。

本企画を通して、世界の差別や貧困と戦う子供たちの生活を実際に体感することで、学べる環境が当たり前ではないという気づきが得られたと共に、自立した生活を楽しんでいる活発で強い子供たちに対して、可愛そうではなく、心から力になりたいと思いました。私たちが製作した商品は、EARTH　GARDEN（JICA中部）で販売されており、また愛知大学、海外提携校のナレースワン大学、アクセサリーを製作するマッチュルームで構成されたチーム「愛LAND」が今後もイベントやオンラインで販売していきます。

販売によって得た利益は全てカサロンの家に寄付することで、継続的な支援を実現したいと考えており、どれも自信を持って販売できるものばかりなので、一人でも多くの方に手に取って頂きたいです。

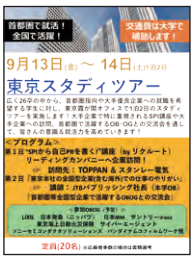
オンライン販売
（マッチュルーム）

教育活動の支援

東京霞ヶ関オフィスで就活生が卒業生と交流

名古屋キャリア支援課
藤田 大介

「東京で働きたいけど漠然と不安がある」、「地元を離れるイメージが湧かない」。就職活動を控える愛大生にとって、就職活動の前に、東京へ行くこと自体が壁になっているようです。コロナ禍の行動制限による閉鎖的環境を経験したことや地元指向の強さも相まって、東京で働くイメージが湧きにくいようです。更に、就職活動に係る東京への交通費も足枷になっています。キャリア支援センターではそんな学生の不安を払拭するため、就職活動本格化の前に「東京スタディツアー」を企画し、9月13日～14日の2日間、愛知大学東京霞ヶ関オフィス（以下:オフィス）を活用し、26卒就活生向けに自己分析講座や企業訪問、卒業生交流を実施しました。事前の書類選考で選ばれた20名（当日18名）は、ツアー当日までに企業研究など課題をこなし参加しました。初日はオフィスで自己分析講座を受講し、学生は改めて自分の志向や業界整理を行いました。午後の企業訪問では、TOPPAN　とスタンレー電気を訪れ、最新の事業内容に関する説明を受け、卒業生との交流も行いました。 2 日目は、関東圏で活躍する若手卒業生　15名がオフィスに集い交流会を実施。齊本正嘉氏（同窓会副会長・千葉県支部長）の激励挨拶から始まり、JTBパブリッシング社長の盛崎宏行氏（1989年・経済卒）の基調講演を行い、学生や卒業生から活発に質問が出されました。また、若手卒業生の"苦労しながらも楽しんで働く"リアルな社会人生活を目の当たりにすることで、学生からは「実際の話を見聞きし"自分ごと"として捉える意識が高まった」、「自分の未来や働く面白さも感じられた」といった声が聞かれました。今回の企画を実施するにあたり、AERSよりキャリア教育事業として学生交通費支援を頂戴しました。今後も学生の"不安感"→"挑戦心"に変えられる機会を提供し続けられるよう、AERS　のご支援をよろしくお願い申し上げます。追伸、同年2月にも1～2年生（31名）対象の同ツアー第二段を行い、学生と卒業生の交流は益々盛り上がりを見せています。



TOPPAN本社での業界・企業説明

JTBパブリッシング社長（盛崎氏）の講演

「東京スタディツアー」に参加して

経営学部3年（2024年度時）
三浦 晃裕

私が東京スタディツアーに参加した契機は、様々な企業のインターンシップを通して感じた地方格差による不安でした。近年、コロナ禍による劇的なオンライン環境の変化に伴い、就職活動における環境も大きく変わりました。実際、私も就職活動を行う中で、オンラインによる面接やGD（グループディスカッション）を数多く経験してきました。この環境の変化により、以前よりも地方学生が東京に本社を構える企業に挑戦できる場が整えられたように感じます。しかし、そのような環境下でも依然として、就職活動における地方格差が存在するのが現状です。具体的には、東京開催の各種就活イベントへの参加やOBOG社員への訪問が比較的、困難であることなどが挙げられます。そして、こうした地方格差やそれに伴う不安が、就活生の挑戦意欲を低下させる要因にもなります。私自身も就職活動を行う中で、それを強く感じてきました。

しかし私はこのツアーを通し、主に3つの観点を達成できたことで、それら不安を軽減することができました。1つ目は就職活動の全体把握です。ネット環境の普及による情報過多により、就活生にとっても情報処理は大きな課題の1つとなりました。その点、ツアー内で自己分析講座を受講できたことで、自分自身を改めて整理することができました。2つ目は企業訪問です。普段、地方で生活している私たちにとって、事前に東京勤務をイメージできるかは重要なポイントです。そのため、自ら企業に訪問し、直接社員の皆様にお話を伺えたことは、非常に有意義な経験となりました。3つ目はOBOG訪問です。前述の通り、地方学生にとってOBOG社員への訪問は比較的、ハードルが高いのが現状です。だからこそ、年次の異なる多種多様な卒業生の皆様と交流できたことは、かなり貴重な機会になりました。

私はこの東京スタディツアーを通し、就職活動に対する当事者意識を大きく高めることができました。東京で勤務する明るい未来を描きながら、今後も就職活動に励んでいきたいと思います。

卒業生との交流

就職活動に臨む学生と関東圏で活躍する若手卒業生との集合写真

教育活動の支援

「奨学金」授与式

2024年12月7日
愛知大学車道キャンパスで実施

2024年度は車道キャンパスコンベンションホールにおいて奨学金授与式を開催しました。勉学意欲が高く、日々頑張っている学生に経済的支援を行い、より一層充実した学生生活を送るとともに希望ある未来を目指してもらうことを願い、6分野の合計95名の学生に奨学金を給付しました。
式では、加藤満憲理事長、八木好郎同窓会会長、武山卓史後援会会長から、挨拶と賞状の授与、広瀬裕樹学長から激励の言葉をいただき、小林慎哉副学長、加納寛副学長、鈴木正也事務局長を始め、多くの関係の方々にご臨席を賜りました。また、受賞した学生を代表して、各分野の3名から感謝の言葉や抱負が語られました。

加藤満憲理事長

広瀬裕樹学長

八木好郎同窓会会長

武山卓史後援会会長

奨学金給付実績	一般給付奨学金 55名　法科大学院特別奨学金 3名　法科大学院入学時給付奨学金 3名 同窓会「知を愛する奨学金」4名後援会学業奨励金 25名　後援会私費外国人留学生給付奨学金 5名

法科大学院特別奨学生

法科大学院1年（2024年度時）
羽賀 早央里

愛知大学法科大学院1年生の羽賀早央里と申します。この度は法科大学院特別奨学生にご採用いただきましてありがとうございます。
私が本学を志望した理由は、実際に弁護士として働きながら勉強をサポートしてくださる先生方によるチューター制度があり、また、実務家の教員の先生方が実際に教えてくださるということで、実務を意識しモチベーションを保ちやすいのではないかと感じたからです。
さらに、少人数制で先生方、チューターの先生方、先輩方、そして同級生みんなで合格を目指す「団体戦」という説明を聞き、司法試験という高い壁を超えることが果たして私にできるかな、と始める前から弱気だった自分にとって、周囲と共に同じ方向を向いて歩みをすすめることができる環境は最適なのではないかと感じたからです。
実際にこの8ヶ月、見識を広め、仲間と共に努力することの素晴らしさを学び、大きく成長することができたと思います。
本学には法曹の世界を知るためのたくさんの行事や制度があり、博士課程に進学された方や、法律事務所の弁護士、企業内弁護士、検察官として働く方々からお話を聞かせていただける機会があったり、複数名いらっしゃる実務家教員の先生方の授業やゼミがあったりし、今学んでいることが具体的にどのように実務につながるか考えることができ、今一度気を引き締めて勉強に取り組むきっかけとなりました。
私には1歳の娘がいまして、入学時は生後4ヶ月でした。基本的に私が保育園のお迎えに間に合う時間に帰宅し、お風呂にいれ、夜ご飯の用意をして一緒に食べて、寝かしつけまでしています。娘と過ごす時間も大切にしていますので、限りある時間のすべてを勉強に費やすことはできません。しかし、少人数制のよさとして、本学には気軽に教えを請うことができる環境がありわからないことをすぐに解決することができます。仲間と共に勉強することで一人では気づけなかった論点や解釈を学ぶことができるし、教えあうことで自分の理解を深めることができます。このように本学では時間のなさをカバーできるほど有意義で効率的な勉強ができていると思います。
勉強は大変なときもありますが親身になってくださる先生方のおかげで、仲間のおかげで、また実際に働くことを意識できる様々な機会のおかげで、モチベーションを高め勉学に取り組むことができています。本学で個に磨きをかけ、ここを巣立つ頃には自信に満ちあふれた自分で社会に出ることができると、若干8ヶ月の院生生活から断言できます。
このような素晴らしい環境を支えてくださる皆様に心より感謝申し上げますと共に、これを機により一層勉学に励むことを誓いまして、私からの挨拶とさせていただきます。この度は本当にありがとうございました。

教育活動の支援

同窓会「知を愛する奨学生」

国際コミュニケーション学部1年（2024年度時）
作田 陽向

この度は「知を愛する奨学生」に採用していただきありがとうございます。愛知大学国際コミュニケーション学部一年の作田陽向と申します。
入学してもう7ヶ月も経ちました。あっという間に一年生が終わりそうで、時間は限られているのだと実感しています。私は、大学は主体的に行動することがとても大事な場だと感じます。そのため、資格試験や自分が挑戦したいことに時間を使い、有益なものにしていきたいです。また、バイト、勉強、課題、サークル、家事に囲まれているのが私の生活です。それぞれに自分の時間をどう効率的に使うかという力を身につけたいです。特に家事は大変で、仕事帰りで少し休んでいるお母さんに「ご飯まだ?」と聞いたり、早朝に家を出るお父さんに「明日体育なのに洗濯してないじゃん」などと失礼なことを言った自分に反省しています。将来の夢はまだ定まっていませんが、私が得意とする英語に関係する仕事につきたいと考えています。
自分自身のため、また支えてくださる両親のためにも学校生活を頑張りたいと思います。

後援会私費外国人留学生給付奨学金

国際コミュニケーション学部3年（2024年度時）
TIAN ZHENYU

この度、愛知大学教育研究支援財団「後援会私費外国人留学生給付奨学金」にご採用いただき、心より感謝申し上げます。
現在私は、日本、アジア、そして日本のサブカルチャーに関する研究に取り組んでいます。この研究を通じて、日本やアジア地域の文化的なつながりや独自性を探求し、特にサブカルチャーが社会や人々に与える影響について深く考察しております。これらのテーマに取り組む中で、文化の多様性や異なる価値観を理解することの重要性を改めて感じています。
これまでの大学生活では、日本文化や専門分野の知識を学ぶだけでなく、異なるバックグラウンドを持つ友人や先生方との交流を通じて、多様な視点を得ることができました。この経験が私の研究にも大きな影響を与えており、視野を広げるきっかけとなっています。
奨学金をいただけることにより、経済的な負担が軽減され、研究や卒業論文の作成に集中できる環境を整えて参ります。またこれを機に、学業に専念し、自分の目標や将来への意欲をさらに高めていきたいです。
愛知大学卒業後は、大学院に進学し、現在研究しているテーマをさらに深化させ、社会に貢献できる研究者を目指したいと考えております。私の夢は、研究成果を活かし、日本やアジアの文化をより広く世界に発信するとともに、多くの人々に役立つ知見を提供することです。
最後になりますが、このような貴重な支援をいただけたことに心から感謝申し上げます。支援くださる皆さまに恥じないよう、今後も精一杯努力してまいります。

「感謝状」贈呈と感謝の集い

2024年12月7日
愛知大学車道キャンパスで実施

当財団は、発足以来、同窓会及び後援会からの寄付に加え、企業や個人会員の皆様からの寄付を始めとするさまざまな形でのお力添えにより事業を実施しており、お陰様にて順調に教育研究支援を進めて参ることができ、心からお礼を申し上げます。
ご寄付を頂いている会員の皆様に、奨学金給付を受けた学生の抱負等を直接お届けしたいとの思いから、奨学金授与式にご招待し、その後引き続いて車道校舎13階第3会議室において、感謝の集いを開催し多くのご寄付を頂いた方への感謝状贈呈を報告しました。
この集いに奨学金受領の学生代表も参加し、学生生活や希望する進路の話とともに、日本各地から名古屋に進学し気候や習慣の違いの驚きなども語られ、大変話が弾みました。また、ご出席いただいた先輩の皆様方からも青春時代の思い出や人生訓などもお話しいただき、出席者全員が有意義な時間を過ごすことが出来、活性化した会となりました。

【感謝状贈呈】
（個人）山崎 恵子様　森 繁美様

教育活動の支援

「奨励賞」授与式

2025年3月8日
愛知大学車道キャンパスで実施

社会・文化・学術・芸術・スポーツ・社会貢献などの分野において活躍し、成果をおさめた個人及び団体に対し、その栄誉を称え、一層の励みとすることを目的に、車道キャンパスのコンベンションホールにおいて顕彰を実施しました。
後援会奨励賞では、1団体と個人5名が最優秀奨励賞に、同窓会奨励賞では、2名の方が最優秀賞に輝きました。スポーツの部〈団体〉で最優秀奨励賞に輝いた準硬式野球部は、第76回全日本大学準硬式野球選手権記念大会で、広島大学、中京大学などの強豪に勝利し、見事ベスト4位入りを果たしました。柔道部の大崎天照氏は、国際大会「Asian Judo Open Hong Kong 2024（アジアオープン香港）」で見事優勝し、第21回湊谷杯全国学生柔道体重別選手権大会等でも優勝するなど輝かしい活躍をされました。
同窓会奨励賞では、マスコミでお目にかかることが多く、中国経済コメンテーターの第一人者として活躍され、最優秀賞受賞の柯隆氏には車道校舎での奨励賞授与式に参加していただき、代表として謝辞をいただく中で、大学生への心強いメッセージもいただきました。

柔道部・大崎天照氏「アジアオープン香港」優勝

カヌー部

千羽鶴メンバー

【後援会奨励賞】
●スポーツの部〈団体〉 •**最優秀奨励賞**：1団体（準硬式野球部） •**優秀奨励賞**：1団体（カヌー部） •**奨励賞**：13団体
●スポーツの部〈個人〉 •**最優秀奨励賞**：5名（柔道部：菅谷佑大氏、大崎天照氏、少林寺拳法部：前越佳音氏、平木良和氏、水泳部：笠原大和氏） •**優秀奨励賞**：9名（柔道部：大藪太郎氏、原田優大氏、深井康雅氏、萩颯太氏、卓球部：小林美沙氏、蜂須賀ひなた氏、軟式野球部（豊橋）：西尾友貴氏、馬術部：三輪耕勢氏、杉山棒規氏） •**奨励賞**：49名

【同窓会奨励賞】
●〈個人〉 •**最優秀賞**：2名（中国経済のコメンテーターの第一人者・柯隆氏）、（弓道日本代表選手2024年度第4回世界弓道大会団体優勝・久野弥花氏） •**優秀賞**：3名（尾崎元章氏、宇佐美友亮氏、前岨音彩氏） •**功労賞**：5名（由本裕貴氏、岩田涼氏、西田将氏、大笹裕豊氏、成瀬瑠美氏）
●〈団体〉 •**優秀賞**：1団体（為廣ゼミナール「千羽鶴」） •**功労賞**：2団体（愛LAND、キャリア支援センター「愛大米」プロジェクト2024）

【クラブ愛知賞（社会貢献の部）】
●〈団体〉**豊橋日曜学校**

【同窓会資格試験合格者】
●〈司法試験〉**森田葉月氏、大田寧々氏、宇佐美大夢氏、式井悠氏、神谷匠海氏** ●〈不動産鑑定士〉**池田匡貴氏** ●〈国家公務員総合職〉**中村光汰氏** ●〈税理士試験〉**中西里菜氏**

「最優秀賞受賞謝辞」

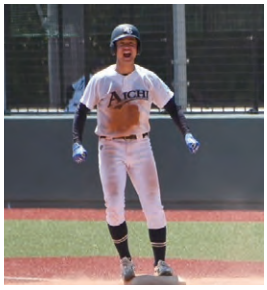
公益財団法人 東京財団政策研究所
主席研究員 柯 隆

皆さん、こんにちは。
この度は大変貴重な賞をいただきまして、光栄でございます。私が愛知大学に在学したのは、1988年4月から1992年3月です。当時の三好の校舎で学びました。日本に来て、3ヶ月後に愛知大学に入学しましたが、当時は法経学部の経営学科でしたので、私にとって良かったのは、経営、経済学だけでなく、法学の勉強も一部出来たことです。そして、住んでいたのは、この車道校舎の側でしたので、当時の車道校舎の図書館をよく利用させていただいて、色んな意味で大変お世話になりました。
先日、スタンフォード大学のある先生とディスカッションする機会がありまして、スタンフォード大学というのはものすごく色々な人材を輩出した大学ですので、大学とは何かと聞きましたら、昔の大学は知識を学ぶところだったが、今の大学は知恵を学ぶところだと言われました。
私は30年も前に愛知大学に在学したときは知識を学んだ訳ですけれども、これからの大学生の皆さんは、是非この愛知大学で知識を学ぶだけでなく、知恵、行動力を手に入れてほしいと思います。本日受賞された皆さんは、知識よりも、知恵・行動力で受賞された訳ですから、私は皆さんの受賞内容を聞いて、本当に良かったと思っています。
これからも私は同窓生の一人として、大学に貢献できることがあったら、遠慮なく要請いただければ、いつでも協力させていただきます。
本日はどうもありがとうございました。
※柯隆氏の特集記事「運命と向き合い日中を見つめてきた半生」が睡蓮11号に掲載されています。

教育活動の支援

24年ぶりのベスト4

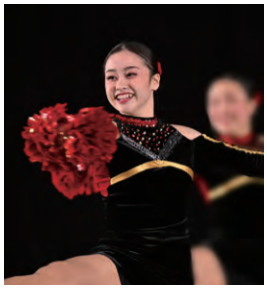
現代中国学部4年（2024年度時）
岩田 涼



この度は、「後援会最優秀奨励賞」、「同窓会功労賞」を授与してい頂き、誠にありがとうございます。準硬式野球部に所属し、最高学年になってから主将として活動してきました。新チームを始動し「全日本選手権大会優勝」を目標に掲げて活動してきましたが、思うような結果が出ず悔しい時期がありました。個人としては、度重なる怪我によって試合に出られず、思うようにいかないなかでチームメイトとぶつかり悩む日も多くありましたが、「全日本選手権大会優勝」という共通の想いがあったのでお互いの意見を尊重し、高め合い、少しずつですが力をつけていくことができました。そして、全日本代表決定戦で優勝し、全国大会の出場を決めることができました。1回戦、広島大学に初回から良い流れを作り8対0で快勝することができ、2回戦の準々決勝では、東海地区でも無類の強さを誇る中京大学との試合でした。序盤に先制点を許すも、どんな状況でも純粋に野球を楽しむという愛大らしさを最後まで貫き続けて8回表に一挙4点を取り大逆転をし、タイブレークまでもつれた試合を勝ち取ることができました。準決勝では、今大会優勝した中央大学との試合で、先制点を取るものの実力者揃いの相手に敗れてしまいました。目標の「全日本選手権大会優勝」はできなかったのですが、24年ぶりのベスト4という過去最高成績に並ぶことができました。振り返ってみると、スターティングメンバーだけでなく他の選手やマネージャーも試合に入り込んだり、ヒットパフォーマンスを全員がやったりとすごく一体感のあるチームになれたからこそベスト4という結果を出すことができたのだと思います。そして、この賞は、選手やマネージャーはもちろん、監督コーチ、部長など関わっていただいた方々のおかげであり、とても感謝しています。今後は社会人として、学生で経験したことを活かしてより成長していきたいと思います。この度は誠にありがとうございました。

同窓会優秀賞を受賞して

国際コミュニケーション学部1年（2024年度時）
前岨 音彩



この度は、同窓会優秀賞を頂き、大変嬉しく思っております。この場を借りまして、厚く御礼申し上げます。
私がダンスを始めたきっかけは、5歳の時に視聴したNHKの「天才てれびくん」の企画で、チアに出会い、興味を持ったことでした。小学5年生までは、三重県にあるチアダンスチームに所属し、「USA All Star Nationals」という全国選手権大会にも出場しました。小学4年生の時に出場した全国大会で、現在所属しているダンスチームの演技に衝撃を受け、「自分もあんな風に踊り、世界大会への切符を勝ち取りたい!」と強く思い、移籍を決意しました。移籍後はチアダンスに加えてジャズ、リリカル、ヒップホップの部門にも挑戦しました。
中学2年生の時、初めて世界大会への出場権を得ましたが、コロナウイルスの影響で大会は中止となってしまいました。それから2～3年間は先が見えず、なんとも言えない苦しくて、悔しい日々が続いていました。しかし、高校2年生の時に再びチャンスをいただき、アメリカ・カリフォルニア州で開催された全米大会「The Showstopper Final」に、ソロとチームの2部門で出場しました。その後の3年間で、複数の国際大会に挑戦し、沢山のことを学び、貴重な経験を積むことができました。これらの経験は決して自分一人の力で成し遂げたものではなく、家族やコーチ、チームメイト、そして応援してくれる友人など、多くの方々の支えがあったからこそ実現できたものだと思います。これからも感謝の気持ちを忘れずに踊り続けていきたいです。
今後の抱負として、アメリカ・フロリダ州で開催される世界選手権大会「The Dance Worlds」に向け、現状に満足せず貪欲に練習を重ね、TOP10入りを目指して頑張ります。また、チームで特に大切にしている「表現力」を磨き、私たちにしか生み出せない世界観や魅力を存分に発揮してきます!
ダンスに打ち込むだけでなく、客室乗務員になるという夢を叶えるために、英語の勉強にも力をいれていきます。持ち前の忍耐力を活かしながら挑戦を続け、自分の可能性を広げていきたいです。

その他、知のミーティング、海外研究実習助成、教育活動助成、キャリア教育事業助成金などの事業を実施

一般県民向けに開催される学術講演会（知のミーティング）等開催への助成、学生が海外を訪問し社会の実情を研究する海外フィールドワークや海外インターンシップ、ゼミ活動、学生の部活動における各種競技大会へ参加する経費等の助成、学生のキャリア育成支援にかかる事業などを実施しています。
2020年度から新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、対面での講演会や海外研究実習などが中止を余儀なくされておりましたが、2023年当初頃より活動の再開が見られるようになり、2024年度はほぼ従前の活性化が見られるようになりました。

寄附者名簿

※（順不同・敬称略）

◆法人

愛知大学後援会
愛知大学同窓会
愛知トヨタEAST株式会社
愛知リーガルクリニック法律事務所
株式会社アシスト
株式会社あのん
宇都宮工業株式会社
株式会社うぽん
NTP名古屋トヨペット株式会社
株式会社えびせんべいの里
オフィス ビジネスサポート
株式会社ガード・リサーチ
木村産業有限会社
ＣＡＮホールディングス株式会社
株式会社共立メンテナンス
近畿日本ツーリスト株式会社
株式会社クイックス
ジャニス工業株式会社
株式会社スウイズ
西濃運輸株式会社
セイユーコンサルタント株式会社
株式会社大学通信
有限会社つボイノリオ商店
デュプロ販売株式会社
税理士法人東海浜松会計事務所
トーテックフロンティア株式会社
トヨタカローラ名古屋株式会社
名古屋競馬株式会社
株式会社ナショナルメンテナンス
株式会社日本一ソフトウェア
日本音楽出版株式会社
株式会社日笠会計
藤岡倉庫株式会社
有限会社フジパッケージ
株式会社フューチャーイン
公益財団法人古川知足会
株式会社ベストライフ
宗次ホール
明治電機工業株式会社
株式会社名大社
ユーティーケー工業株式会社
株式会社Re・lation

◆個人

明　昭一
青野吉伸
足立光則
荒木仁子
有森茂生
石川常太郎
石川光男
石澤　務
伊藤広済
稲田正俊
岩田喜久
内山隆司
畝　一雄
遠藤精基
大江恒晴
岡村幹吉
加藤孝雄
加藤道明
加藤満憲
岸田充広
國島芳明
熊谷友佳理
栗原　裕
甲村洋子
佐藤隆子
下和田恵男
庄田元久
菅野　隆
菅原宜彦
杉原啓次
杉本みさ紀
鈴木孝一
鈴木　智
高木　守
高間益雄
髙野史枝
高橋俊一
竹島良祐
竹島まこと
武田秀則
田原茂穂
土井義昭
唐　啓山
鳥越　剛
中江正弘
中島寛司
中野貴文
那須國宏
西川米子
野末英俊
橋本千洋
橋本良男
橋本正洋
土師幸夫
長谷川勲
長谷川信義
林　一義
林　貞男
林　昇平
林　行孝
速水利行
日笠羽司名
樋口裕嗣
久里和英
平井治彦
平松礼二
廣重美和子
福田　豊
藤井千恵子
藤井明雄
藤岡勢理
藤田拓也
二村友佳子
堀田正二
堀田久富
堀木ヒロミ
猿爪雅治
松井淳子
松野博美
森　繁美
森　善徳
八木好郎
安井健治
安井博子
矢橋大三郎
山﨑恵子
山田　功
湯山義則
脇水達生
和田信敏

※その他匿名希望者あり

皆様からお寄せいただいた温かいご支援に心よりお礼申し上げますとともに、今後とも一層のご支援ご協力をお願い申し上げます。

※本財団に寄附した年会費及び寄附金は、法人税・所得税の優遇の対象となります。（詳しくは、税務署へお問い合わせください）

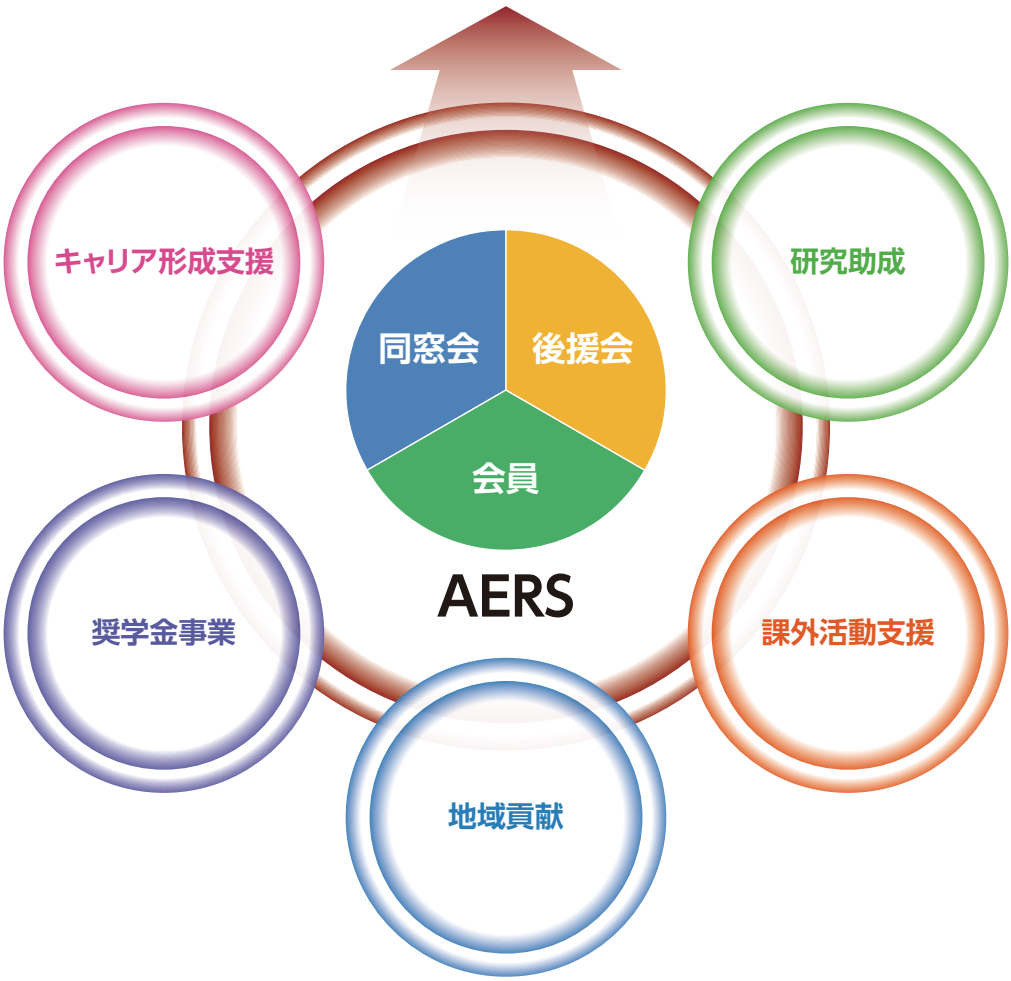
2012年11月、より地域社会に貢献する人材の育成を重視した財団として、公益財団法人「愛知大学教育研究支援財団」を設立いたしました。本財団は、愛知大学における学術研究及び教育活動を支援し、もって広く学術の発展と教育の充実、不特定多数の利益の増進に寄与するための事業を実施しています。ひとりでも多くの研究者や学生、ひとつでも多くの事業に助成が活かされることを願って、幅広く応募の機会を開いています。これらの事業は、同窓会費・後援会費を始め、広く一般企業・個人の皆様の会費・寄附を貴重な原資としております。今後ともの活動にご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

■財団の基本情報

名称	公益財団法人愛知大学教育研究支援財団
設立日	1965（昭和40）年9月7日（財団法人 愛知大学同友会）
移行日	2012（平成24）年11月1日
代表者	理事長　加藤満憲
事務局	〒461-8641　名古屋市東区筒井2-10-31
電話番号	（052）937-8156
FAX	（052）937-8157
e-mail	kouyu@aichi-u.ac.jp
ホームページ	http://www.aichi-u.ac.jp/aers

社会で活躍できる優れた人材の育成

愛知大学



AERS

知で活きる人へ。

公益財団法人 愛知大学
教育研究支援財団

AICHI UNIVERSITY EDUCATION RESEARCH SUPPORT FOUNDATION

制作･印刷：大日本印刷株式会社